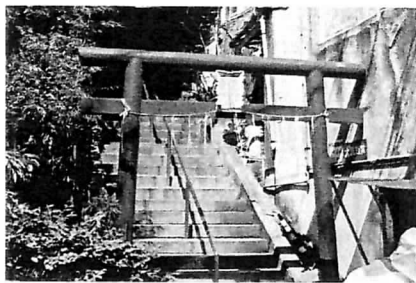


小滝の泉(その2)



(滝が流れていた付近にある鳥居)

かけて住む者にとつて忘れられない場所があります。それは『小滝の泉』、正しくは正一位滝山稻荷大明神と言うお稲荷さんの下に滔々とうとうと流れ落ちる小さな滝の事です。

四季を通し水温は変わらず、落差は一メートル程、口径10センチメートル位の鉄管から常に一定の水が流れ落ちる様は正に『小さな滝』でした。落下する下には6畳程、深さ50センチメートル位の池があり鯉や鮒が放流され、また池の際には神楽殿、御輿蔵があるなど、格好の憩いの場所でした。

冬は暖かく、夏は冷たく感ずるこの水は洗顔には持つてこい、ビールや西瓜を冷やし、また今で言うミネラルウォーターは何時でも飲めました。そしてあの悲惨な昭和20年5月の空襲でこの地区一帯が焼土と化した時、あの泉の水で救われたと語る人もいます。

都内でも湧水がこの様に出る場所は珍しく地元の誇りにしていました。昭和30年頃水源である土地に高層建築が出来て水源を断たれた為、日夜親しんだ小滝の泉は『幻の滝』になってしまいました。

続・山手通り(その1)

『山手通り』については、東中野今昔ものがたり21(平成13年4月号)と22(6月号)と2回に渡って連載しましたが、4年経った現在の『山手通り』は、すっかりその姿を変換しました。

今、私の手元に明治初期からの地図があり、年代を追って見て行くと、地形の変化がよく判ります。

東海、日光、奥州、中山そして甲州と言った、江戸を起点とした諸街道は時代と共に拡幅整備されてきましたが、昭和の初期まで山手通りは影も形も在りませんでした。関東大震災を契機に、首都の機能を充分に果たすため、道路の整備が必要と立案されたのが環状線で、幅員22mという道路は、当時としては『夢』のような道路でした。昭和に入り計画着工されましたが、昭和16年太平洋戦争の開始で工事は中断されました。



現在整備中の山手通り

しかし日本の戦後復興は想像以上に発展し、特に車社会は交通の常識を一変し、更なる道路拡張の必要に拍車をかけました。

今その山手通りが日一日と変換し、記憶に残る往年の姿と比較すると、隔世の感が脳中にひらめきます。

